

# 韓国語教育の現状と展望： アンケート調査の結果から

金 情浩

キーワード：韓国語教育、韓国語（人）に対するイメージ、異文化教育

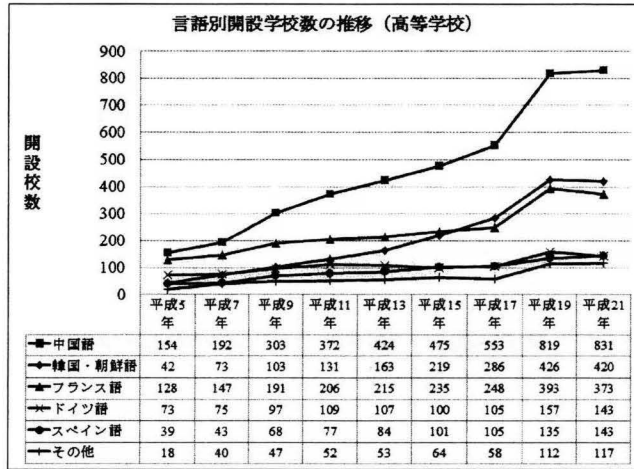
## 1. はじめに

韓国と日本は2002年の韓日共催のサッカーワールドカップや近年の「韓流ブーム」といわれる社会的現象に見られるように、この数年で、両国の心理的距離が急速に近づいた。さらに、大学入試センター試験に韓国語が導入された2002年以降を見ても分かるように、高等学校と大学では、韓国語の学習者が年々増加する傾向にある<sup>1</sup>。このような日本国内での韓国文化や韓国語に対する関心の増加とそれに伴うニーズの多様化に対応するには、まずは韓国語・韓国文化教育の現状を正しく認識することが求められる。そこで本稿では、アンケート形式で仙台市の大学に在学中の韓国語学習者と非学習者を対象に韓国語と韓国（人）に対する意識調査を行った。

## 2. 教育機関における韓国語教育の実施状況

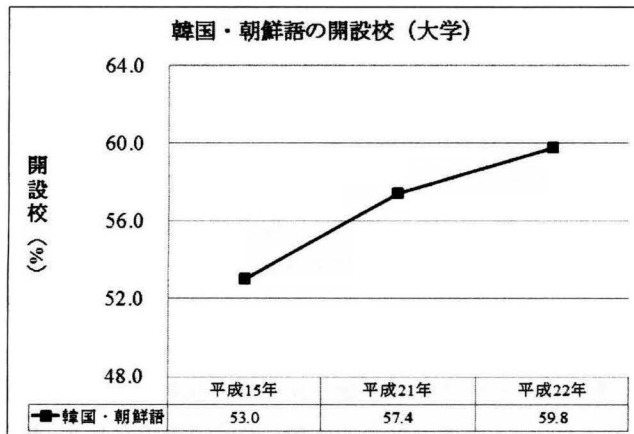
日本の教育機関（高等学校と大学）における韓国語・朝鮮語教育の実施状況を（図1）と（図2）に示す。（図1）は英語以外の外国語を開設している高等学校の数（私立と公立の合計数）を示したもので、平成5年度にわずか42校だったのが、ワールドカップ共催の翌年の平成15年には219校と5倍近く韓国語・朝鮮語教育の実施校が増加した。さらに、平成21年度には420校に達し、中国語に次ぐ2番目に多い外国語実施科目となった。各言語を全体で占める割合（平成5年と21年度の割合の比較）の伸び率でみると、韓国語・朝鮮語が11.5%と最も高く、次が中国語の7.1%だった。一方、フランス語・ドイツ語・スペイン語の教育実施機関数の割合は、それぞれ-9.8%、-9.0%、-1.5%のマイナスとなっている。このように韓国語・朝鮮語教育を行う教育機関が急激に増えたのはいわゆる「韓流ブーム」といわれる社会現象だけではなく、大学入試センター試験に韓国語が導入されたのも一因と考えられる。

<sup>1</sup> 「朝鮮語、コリア語、ハングル語、韓国・朝鮮語」など教育機関ごとに異なる名称を使っているが、本稿では資料などの引用部分以外は、韓国語を代表名称で使うことにする。



(図1) 日本の高等学校における韓国語・朝鮮語教育の実施状況<sup>2</sup>

(図2)は大学教育機関で韓国語・朝鮮語の授業を実施している教育機関数(%)を示したもので、平成22年度には全体の6割近くの大学で韓国語の授業を開設しており、高等学校だけではなく大学教育機関においても年々増加傾向を見せていることが分かる。



(図2) 日本の大学教育機関における韓国語・朝鮮語授業の開設校(%)<sup>3</sup>

このように年々増加すると予測される未来の予備学習者に対する多様なニーズに教育機関がしっかり対応していくには、現学習者の学習動機やその目標などの実情を理解することが

<sup>2</sup> 高等学校のデータは、文部科学省の資料

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/22/01/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1289270\\_1\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/01/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1289270_1_1.pdf)) より改変。

<sup>3</sup> 文部科学省の「大学における教育内容などの改革状況について」を参考に作成した。

必要である。以下では、大学教育機関における今後の韓国語教育の在り方と方向性を示すために実施したアンケート調査の概要とその結果について報告する。

### 3. アンケート調査の概要と結果

#### 3.1 調査方法

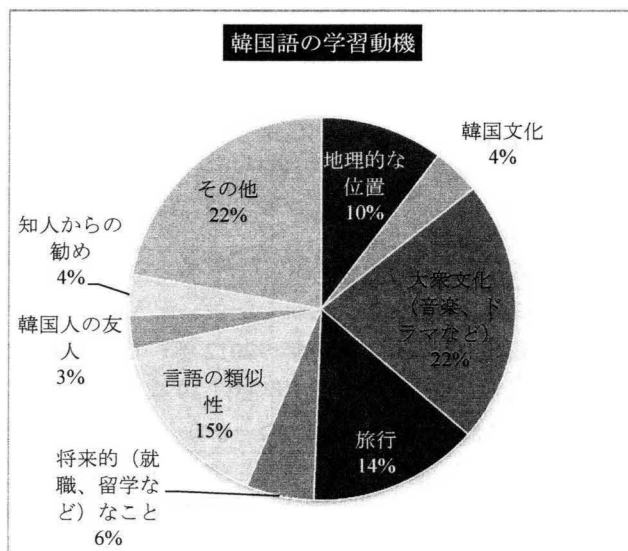
宮城県仙台市内の4つの大学教育機関に在学中の大学生を対象にアンケート形式で調査を行った。一人一人の参加者に対しアンケート用紙を配付、記入後にアンケート用紙を回収、集計を行った。調査の実施期間は2年間（2011年～2012年）で、本調査には17歳から24歳までの男女266名が参加した。参加者全員の平均年齢は19歳4ヶ月で、その標準偏差は $\pm 1.0$ だった。男女別にみると、男性が83名（ $M=19.0$ 歳,  $SD=\pm 0.7$ ）、女性が183名（ $M=19.6$ 歳,  $SD=\pm 1.1$ ）だった。アンケートの質問項目は、金（2004）と林・姜（2007）のものを参考にしており、大きく、韓国語に対する意識調査と韓国（人）に対する意識調査の2つの項目に分けられる。また、本稿では、韓国語あるいは韓国（人）のイメージ形成に影響を及ぼす要因を探るため、非学習者のデータ及び韓国人の友人の有無についての質問項目を設けた。

#### 3.2 「韓国語」に対する意識調査

韓国語については、韓国語学習の学習動機と学習目標、学習経験に対する感想、韓国語学習の難しい点、そして韓国語に対するイメージ調査を行った。

##### 3.2.1 韓国語学習者の学習動機

韓国語の学習経験があると答えた参加者に自由記述形式で学習動機を記入してもらったところ、(図3)に示したとおり「音楽」や「ドラマ」などに影響を受け、韓国語を勉強したくなったと答えた人が全体の22%を占め、韓国語の学習動機が一番大きい要因となっている。しかし、林・姜（2007）では、本調査の結果とは異なり韓国のドラマなどが学習動機にそれほど大きく影響しないと報告している。これは「冬のソナタ（겨울연가）」をはじめとする韓国ドラマなどが年長者に人気を得ていたいわゆる韓流ブームの初期とは違い、今は韓国ドラマや音楽などの大衆文化のみならず、政治・経済にまで広がりさらには若い人にまで浸透していることに起因するものと考えられる。その次に割合が大きかったのは「言語の類似性」で全体の15%を占めていた。韓国語は日本語と同様、主語・目的語・動詞の語順を持ち、格助詞（「が」とか「を」）により文の中での役割が決まる言語であることから、他の言語より覚えやすいという印象を持っているようで、それがまた単位のとりやすさにもつながるといえる声は韓国語学習者に多いのも事実である。「旅行で韓国に行きたいから」と答えた人も14%を占めており、いわゆる韓国大衆文化の「韓流ブーム」が韓国語の学習動機に大きく影響し



(図3) 韓国語学習者の「学習動機」

ていることが分かった。「その他」に分類された学習動機には、工学分野（サムスンやLG電子など）や政治、サッカー選手に興味があったからと答えた学習者もいた。また、ここで見過ごしてはいけないのは、6%という少数ではあるが「将来的（就職、留学など）なこと」を学習動機として挙げている学習者がいるということである。このような学習者には、教員と大学側で何らかの情報提供やサポートが必要であると思われる。そのためにも学期初めに学習者の学習目標を確認することは非常に大事な手続きであるに違いない。

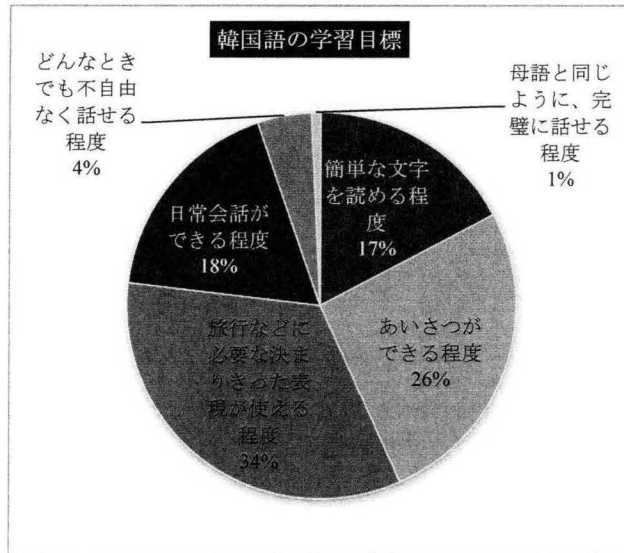
### 3.2.2 韓国語の学習目標

学習者の学習目標を特定するため、以下のような質問をした。

【問】あなたはどのレベルまで「韓国語」を学習する予定ですか。「韓国語」の『学習目標』を一つだけ選んで○で囲んでください。

- |                           |                      |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 簡単な文字を読める程度            | 2. あいさつができる程度        |
| 3. 旅行などに必要な決まりきった表現が使える程度 | 4. 日常会話ができる程度        |
| 5. どんな時でも不自由なく話せる程度       | 6. 母語と同じように、完璧に話せる程度 |

その結果、「旅行などに必要な決まりきった表現が使える程度」「日常会話ができる程度」の中級レベルを学習目標として設定している学習者が一番多く 52%を占めていることが分かった。一方で、「どんな時でも不自由なく話せる程度」「母語と同じように、完璧に話せる程度」の高い目標意識を持っている学習者の割合は5%に留まっており、「簡単な文字を読める程度」「あいさつができる程度」の初級レベルを学習目標として設定している学習者が43%を占め



(図4) 韓国語学習者の「学習目標」

ていた。

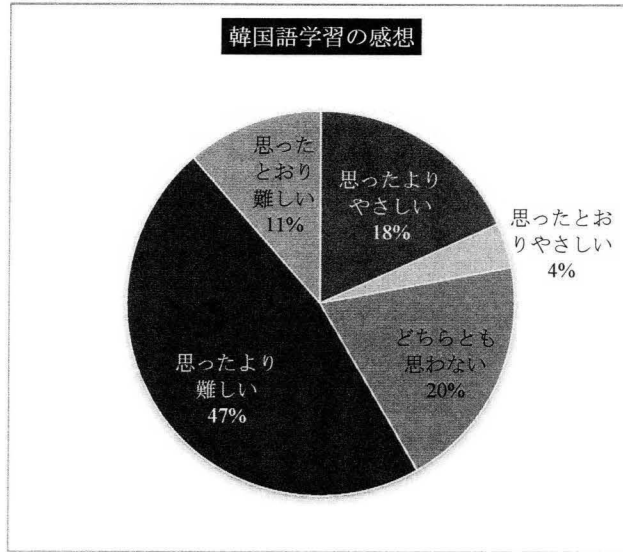
### 3.2.3 韓国語学習の感想（自己評価）

韓国語の学習体験に対する感想を確かめるため、以下の質問項目について答えてもらった。

【問】あなたは「韓国語」を学習してみてどう思いましたか。

- |             |              |             |
|-------------|--------------|-------------|
| 1.思ったよりやさしい | 2.思ったとおりやさしい | 3.どちらともいえない |
| 4.思ったより難しい  | 5.思ったとおり難しい  |             |

実際に韓国語を学習してみた感想を尋ねたところ、学習者のほぼ5割が「思ったより難しい」と答えた。日本語と韓国語は同じく漢字を使用したり、語順が同じで、格助詞により主語と目的語が決まるなど、たくさんの類似性を持つ言語ではあるが、学習の初期段階では、初めて目にする文字や発音を覚えるのに大変苦戦する学習者が多いのも事実である。本調査に協力してもらった学習者の平均学習歴が8ヶ月であることも5割の学習者が「思ったより難しい」と答えた一つの要因と考えられる。中級レベルの学習者を対象にした場合は、結果が変わる可能性もあるが、結果はともあれ、絵の教材や視聴覚教材などの中級者向けのテキストが乏しいのが現状で、学習者の学習時間に合わせた体系的なテキスト開発が急がれる。



(図5) 韓国語学習者の学習感想

### 3.2.4 韓国語学習で最も難しいところ

学習者が韓国語を学習する際に最も苦労するところを探るため、以下のような質問をした。

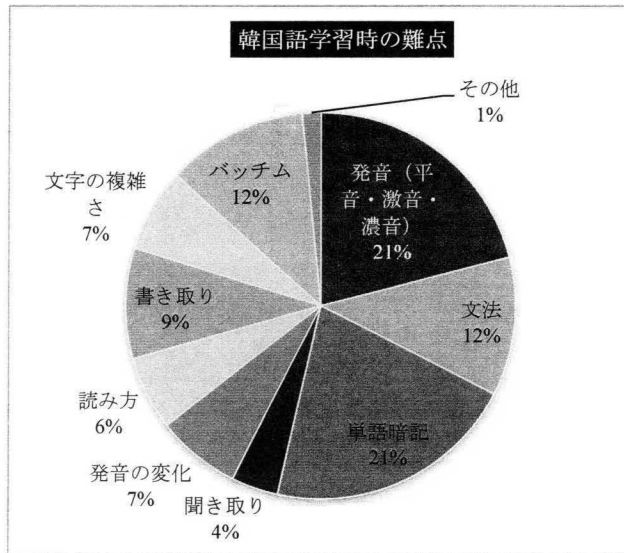
【問】「韓国語」学習の時に何が一番難しかったですか。一つだけ選んで○で囲んでください。

1.発音（平音・激音・濃音） 2.文法 3.単語暗記 4.聞き取り 5.発音の変化  
6.読み方 7.書き取り 8.文字の複雑さ 9.パッチム 10.その他

その結果、(図6)に示したとおり、「発音（平音・激音・濃音）」<sup>5</sup>と「単語暗記」がそれぞれ21%で最も高く、「文法」と「パッチム」<sup>6</sup>がそれぞれ12%だった。3.2.3節でも言及したが、本調査に参加した学習者の平均学習歴が8ヶ月であることが今回の結果に何らかの影響を及ぼしていると考えられ、この結果もまた中級・上級学習者になると変わる可能性が十分考えられる。本結果は、少なくとも学習の初期段階では発音の練習に十分な時間をかけるなどの細心の配慮が必要であることを示している。しかし、学習の難点として「文法」が12%を占めていることは意外な結果だった。

<sup>5</sup> 激音には「ㄱ[k<sup>h</sup>]、ㄷ[t<sup>h</sup>]、ㅍ[p<sup>h</sup>]、ㅌ[t<sup>h</sup>]、ㅎ[h]」の5つの子音が、濃音には「ㄱ[ʔk]、ㄷ[ʔt]、ㅍ[ʔp]、ㅌ[ʔt]」の5つの子音がある。

<sup>6</sup> 子音（初声）と母音（中声）の次に来る子音（終声）のことを「パッチム」と呼ぶ。

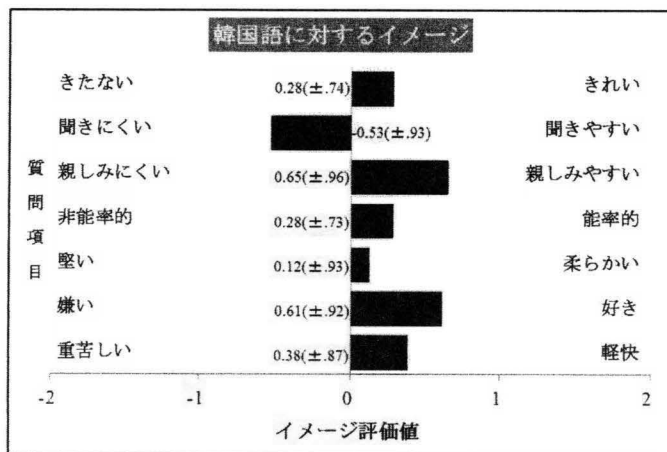


(図 6) 韓国語学習の時に一番難しいところ

### 3.2.5 韓国語に対するイメージ

本調査では、SD 法 (Semantic Differential Method または、Semantic Differential Scale Method) の統計手法を用いて韓国語に対するイメージ調査を行った<sup>7</sup>。質問項目は金 (2004) と林・姜 (2007) に従い、(図 7) に示したように「きたない／きれい」「聞きにくい／聞きやすい」「親しみにくい／親しみやすい」「非能率的／能率的」「堅い／柔らかい」「嫌い／好き」「重苦しい／軽快」の 7 つを用いた。韓国語に対することばのイメージは 5 段階 (-2 -1 0 1 2) で評価をしてもらった。評価値が -2 に近いほどマイナスイメージ (例えば、きたない) が強く、2 に近いほどプラスイメージ (例えば、きれい) が強いと評価される。調査の結果、「聞きにくい／聞きやすい」の項目でマイナスイメージを示したものの、それ以外の項目では、韓国語についてプラスイメージを持っていることが分かった。「聞きにくい／聞きやすい」の項目がマイナスイメージになっているのは、本調査に協力してくれた韓国語学習者の平均学習歴が 1 年以下であることが一つの要因と考えられる。また、小学校や中学校からなじみのある英語とは違い、大学での韓国語授業は、学期初めの頃から一か月余りの時間を発音練習に充てているが、15 回の授業日数のうち 5 回以上を発音練習に回すのは厳しく、学生一人一人の発音をすべて確認するのもまた難しいのが現状である。また、韓国語には日本語にはない「激音・濃音」などの発音も含まれており、さらにはバッチムと呼ばれる子音の右側に「ㅇ, ㅎ」が続く場合は発音の際にバッチムの子音が移動して発音されるなど、日本語では馴染みのない発音規則がたくさんあるので、5 回程度の授業ではすべての発音規則をととても覚えきれない

<sup>7</sup> SD 法は、意味差判別法と呼ばれるもので、「きたないーきれい」のように対立する形容詞の対を用いていくつかの段階の評価値に分けて判定する方法である。



(図7) 学習者の韓国語に対するイメージ評価 ( ( ) は標準偏差)

いのも現状である。このことは、3.2.4 節で発音の学習が一番難しいと答えた学習者が全体の3割を占めていることからもうかがえる。時間をかけて学習者一人一人の発音を確認・訂正していくのが最も解決策であるが、ほとんどの学習者が1年しか韓国語を受講しないという現実を考えると実現が難しいのも事実である。

### 3.3 韓国と韓国人に対するイメージ調査

韓国(人)については、韓国に対する認知度や関心度、興味を持っている分野、韓国人に対するイメージについて調査を行った。

#### 3.3.1 韓国の認知度

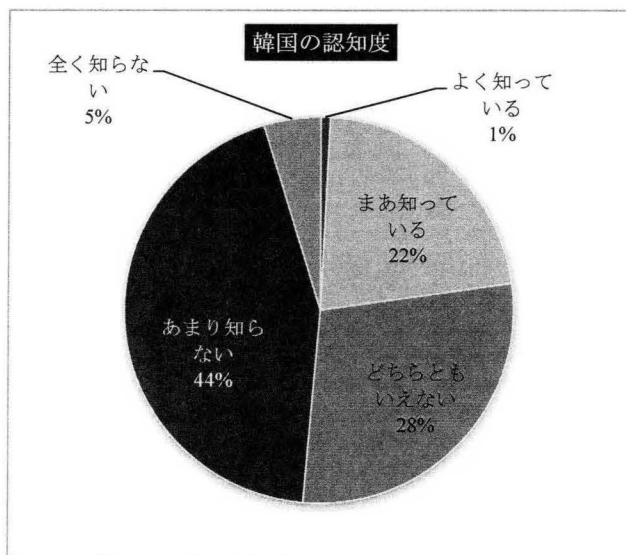
韓国に対する認知度を調べるため、以下のような質問項目に答えてもらった。

【問】あなたは「韓国」のことをどのくらい知っていますか。

- 1.よく知っている
- 2.まあ知っている
- 3.どちらともいえない
- 4.あまり知らない
- 5.全く知らない

調査の結果、「よく知っている」と「まあ知っている」がそれぞれ1%と22%で、「あまり知らない」「全く知らない」がそれぞれ44%と5%だった。(図8)から分かるように、「韓流ブーム」という社会現象とは裏腹に回答者の5割近くが韓国のことをあまりあるいはまったく知らないと答えた。この結果は、マスコミなどを通じて韓国の役者やドラマ、音楽などについての情報は持っても韓国の伝統文化や生活事情などについてはあまり知らないと解釈することができる。また、大学などの教育機関で韓国語の授業は開講していても韓国の文化などを教えるための異文化教育の科目を特に設けてないことにも原因があると思われる。単に





(図 8) 韓国に対する認知度

韓国語の知識を伝えるだけではなく、一歩踏み込んだ総合的な知識の伝授の必要性を示す結果である。

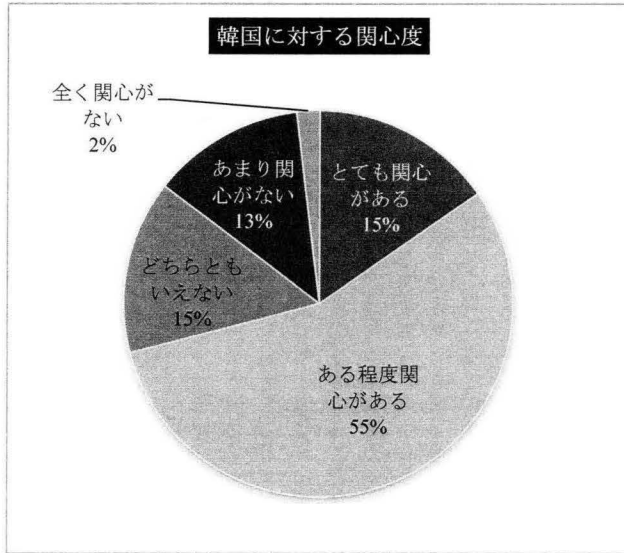
### 3.3.2 韓国に対する関心度と興味を持っている分野

韓国に対する関心度を調べるために、以下のような質問項目を設定した。

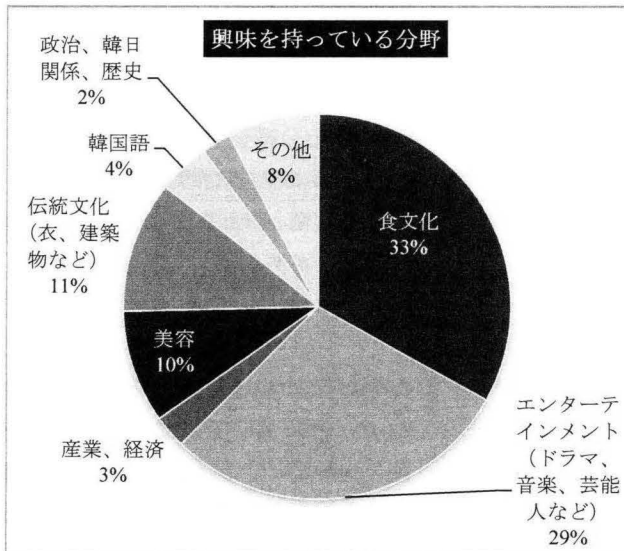
【問】あなたは「韓国」についてどの程度関心がありますか。

- |            |             |             |
|------------|-------------|-------------|
| 1.とても関心がある | 2.ある程度関心がある | 3.どちらともいえない |
| 4.あまり関心がない | 5.全く関心がない   |             |

(図 9) から分かるように「とても関心がある」が 15%、「ある程度関心がある」が 55%で、回答者の 7 割が興味を持っていると答えた。次に関心分野について自由記述形式で書いてもらった。その結果、「食文化」33%、「エンターテイメント」29%、「伝統文化」11%、「美容」10%の順に関心領域が分かれた。この結果はまさに「韓流ブーム」を反映しているもので「食文化」と「エンターテイメント」、「美容」を合わせると回答者の 7 割が「韓流ブーム」の影響を受けていると言える。次に、韓国語の学習経験の有無が韓国に対する関心度に影響するかどうかを調べるために行った  $t$ -検定では、両グループ間で有意な差は認められなかった ( $t(258)=-1.23, p=.22$ )。このことから韓国語の学習経験の有無に関係なく、「韓流ブーム」は若い世代にまで深く根付いていると考えられる。金 (2004) でも指摘しているが、学習者は、韓国の大衆文化だけではなく歴史・政治・経済など韓国の多様な分野にも関心を持っていることから、韓国語教育においても、異文化教育を積極的に導入することで、韓国文化に対す



(図9) 韓国に対する関心度

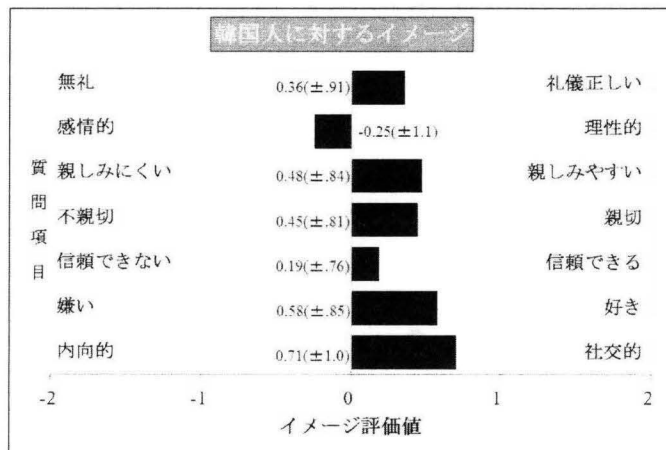


(図10) 韓国の関心分野

る好奇心と関心を一層高め、学習動機を刺激する効果が期待できる。その実践案として skype や e-mail などインターネットの活用による異文化コミュニケーションの可能性があげられる。また、韓国人コミュニティーとの交流の場を設けたり、民間団体の行事などへの積極的な参加を促すことも、韓国語と韓国（人）に対する関心度の促進につながると期待できる。

### 3.3.3 韓国人に対するイメージ（SD法）

3.2.5 節に続き、SD法を用いて韓国人に対するイメージ調査を行った。質問項目は「無礼／礼儀正しい」「感情的／理性的」「親しみにくい／親しみやすい」「不親切／親切」「信頼できない／信頼できる」「嫌い／好き」「内向的／社交的」の7つを用いた。イメージ評価値は韓国語のイメージ調査と同様、5段階（-2 -1 0 1 2）で評価してもらった。調査の結果、「感情的／理性的」の質問項目だけがマイナスイメージになっており、他の項目についてはそれほど強いとは言えないが、プラスイメージを持っていることが明らかになった。また、本結果は、林・姜（2007）の調査結果とほぼ同じで5年前も今も韓国人に対するイメージはやや感情的であると判断していることが分かった。両国間の歴史問題や領土問題などの認識の食い違いがイメージ形成に何らかの影響を及ぼしているものと思われる。

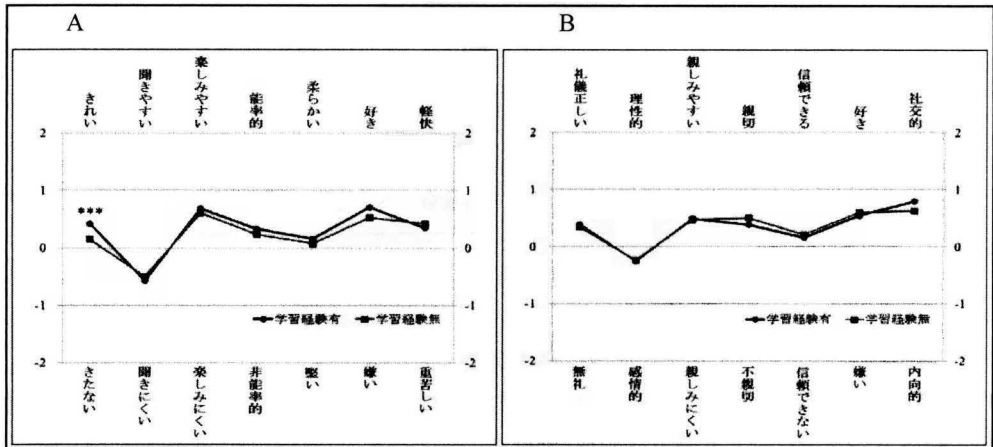


(図 11) 回答者全員の韓国人に対するイメージ

### 3.3.4 韓国語と韓国人のイメージ形成に最も影響する要因

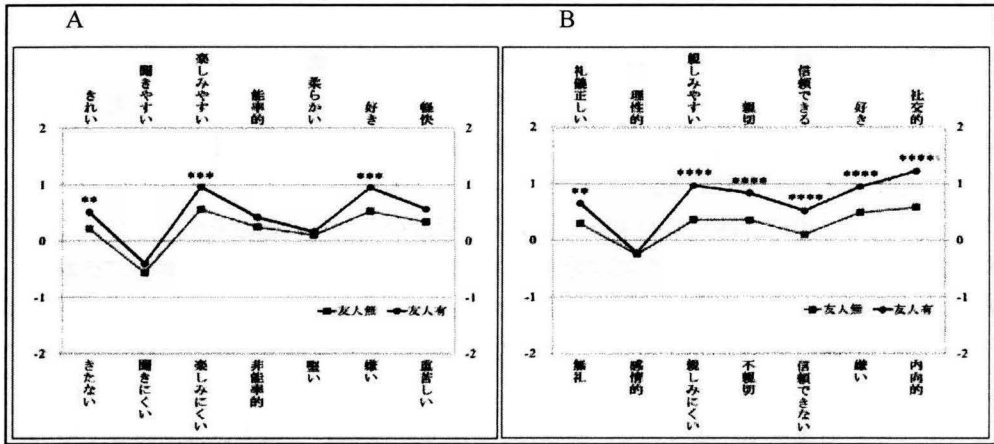
3.2.5 節と 3.3.3 節で回答者が持っている韓国語と韓国人のイメージについて報告した。韓国語と韓国人のイメージに影響を及ぼす要因はいろいろ考えられるが、本調査では、質問紙項目に含まれていた①「韓国語の学習経験の有無」、②「韓国人の友人の有無」の2つの要因がどのように影響するかを検証するため、*t*-検定による統計分析を行った。まず、韓国語に対するイメージは韓国語の学習経験がある回答グループと学習経験のない回答グループ間で「きたない／きれい」の質問項目においてだけ、学習経験のある回答グループの方が0.5%の有意水準でプラスイメージが強い結果となった ( $t(260)=3.07, p<.005$ )。そのほかの質問項目では両グループ間で有意差は認められなかった (図 12A)。このことは韓国語に対するイメージ形成に韓国語学習経験の有無はそれほど影響しないことを意味する。続いて、韓国人のイメージ形成に韓国語の学習経験の有無がどれほど影響を及ぼすかを調べるため、グループ間の

t検定を行った。その結果、どの質問項目においても統計的に有意な差は認められなかった(図12B)。この結果もまた、韓国語に対するイメージと同様、学習経験の有無は韓国人のイメージ形成にほとんど影響を及ぼさないことを意味する。次に、韓国人の友人の有無による影響を調べるため、グループ間のt検定を行った。その結果、韓国語に対するイメージにおける「きたない／きれい」「楽しみにくい／楽しみやすい」「嫌い／好き」の3つの質問項目で有意差が観察された ( $t(260)=2.61, p<.01$ ;  $t(260)=2.81, p<.005$ ;  $t(259)=3.07, p<.005$ )。また、韓国人のイメージについても両グループ間で「感情的／理性的」以外の質問項目の「無礼／礼儀正しい」「親しみにくい／親しみやすい」「不親切／親切」「信頼できない／信頼できる」「嫌い／好き」「内向的／社会的」において有意差が認められた ( $t(259)=0.18, p=.86$ ;  $t(259)=2.60, p<.01$ ;  $t(259)=4.93, p<.001$ ;  $t(259)=4.02, p<.001$ ;  $t(259)=3.66, p<.001$ ;  $t(259)=3.66, p<.001$ ;  $t(259)=4.25, p<.001$ )。この結果は、韓国語の学習経験の有無ではなく、韓国人の友人がいるかないかという要因が韓国語と韓国人のイメージ形成に大きく影響することを示している。さらには、大学教育機関における韓国語の授業は、単に文法知識を学習者に伝授するにとどまってはいけないことを示唆する。両言語の学生同士の交流の機会を増やすなどの教育プログラムの改善が求められる。



(図12) 韓国語学習経験の有無が韓国語 (A) と韓国人 (B) のイメージ形成に及ぼす影響

(\*\*\* $p<.005$ )



(図 13) 韓国人友人の有無が韓国語 (A) と韓国人 (B) のイメージ形成に及ぼす影響  
 (\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .005$ , \*\*\*\* $p < .001$ )

#### 4. まとめ

本稿では、日本国内での韓国語や韓国文化に対する関心の増加とそれに伴うニーズの多様化に対応するための第一歩として、仙台市に在学中の大学生を対象に韓国語と韓国人に対する意識調査を行った。その結果、韓国語と韓国人に対するイメージは金 (2004)、林・姜 (2007) の調査報告とほとんど変わらず、韓国語については「聞きにくい／聞きやすい」の質問項目が、韓国人については「感情的／理性的」の質問項目がマイナスイメージになっていることが分かった。まず、韓国語が「聞きにくい」というイメージが強いのは、日本語の母語話者にとって韓国語の「激音・濃音」など、普段馴染のない発音に大変苦戦することがその要因と考えられ、より体系的なテキスト教材の開発が急がれる。次に、韓国人が感情的であるイメージが強かったのは、両国間の歴史問題や領土問題などが依然としてイメージ形成に何らかの影響を及ぼしていることから起因するものと思われる。

また、韓国語に対するイメージ調査の結果、学習者の学習動機には、いわゆる「韓流ブーム」の社会現象が大きく影響していることが分かった。学習目標は学習者の 52% が中級レベルを、学習者の 43% が初級レベルを学習目標として設定していることが明らかになった。韓国語学習の感想については、5 割の学習者が「思ったより難しい」と答え、特に発音 (パッチム、発音の変化など) の習得に苦戦している学習者が 4 割にも上った。次に、韓国 (人) に対するイメージ調査の結果、韓国に対する関心度においては 70% の回答者が「とても関心がある」あるいは「ある程度関心がある」と答えたのに対し、韓国の認知度については 49% の回答者が「あまり知らない」または「全く知らない」と答えた。単に韓国語の知識を伝えるだけでなく、一歩踏み込んだ総合的な知識の伝授の必要性を示唆する結果となった。

最後に、韓国語と韓国人のイメージ形成に最も影響を及ぼす要因を探るため、①「韓国語の学習経験の有無」、②「韓国人の友人の有無」の2つの要因を用いてt検定による統計分析を行った。分析の結果、韓国語の学習経験の有無ではなく、韓国人の友人の有無が韓国語と韓国人のイメージ形成に最も影響を及ぼす要因であることが分かった。この結果もまた、大学教育機関における韓国語の授業は、単に文法知識を学習者に伝授するにとどまっていけないことを示唆するものである。

外国語学習は、単に当該言語の学習に留まるのではなく、その言語を使用している言語集団の世界観や生活様式などもともに学習することを意味する。その中でも韓国と日本は、歴史的・文化的にも非常に密接な関係を持ちつつも、様々な場面において文化的差異を経験できることから、韓国語学習を通して自国および海外の文化を認識する格好の機会を提供できる。とくに大学における韓国語教育の充実は、これからの韓日両国間の友好関係を維持・発展させるためにも重要な課題である。今後は、調査範囲を広げて韓国語母語話者や中国語母語話者を対象に各言語の母語話者がもっている相手国の言語・文化に対する認識調査を行いたいと思っている。

## 付記

本研究は、日本学術振興会の科学研究費補助金（若手研究 B, 23720193）の助成を得たものである。また、本アンケート調査を実施するにあたり、権来順氏と張基善氏にご協力をいただきました。ここに、心より感謝の意を表します。

## 参考文献

- 金由那（2004）「韓国・朝鮮語教育の現状と学習者の意識に関する調査研究：愛知県所在教育機関の日本人および在日韓国・朝鮮人学習者を対象として」『ことばの科学』17、215-236、名古屋大学言語文化研究会
- 林炫情・姜姫正（2007）「韓国語および韓国文化学習者の意識に関する調査研究」『人間環境学研究』5(2)、17-31、広島修道大学
- 文部科学省（2010年1月28日）「平成20年度高等学校等における国際交流等の状況について」[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/22/01/1289270.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/01/1289270.htm)
- 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成17年度）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/005/05033001.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/005/05033001.pdf)
- 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成20年度）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1294057.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1294057.htm)
- 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について（平成21年度）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/1310269.htm)

金情浩（東北大学文学研究科 研究支援者）

(韓國語要旨)

한국어 교육의 현재와 전망: 앙케트 조사 결과를 통해  
(Current Status and Prospects of Korean Education: A Questionnaire Survey Report)

김 정호

한국과 일본은 2002 년 한일 월드컵 공동 개최 이래 급속하게 관계가 개선되었다. 한편 한류라는 사회현상까지 동반되어 일본 국내의 한국어와 한국문화에 관한 관심도 또한 급속히 증가하고 있는 추세다. 이러한 급속한 사회변화에 동반되는 한국어 학습자의 다양한 요구에 대응하기 위한 첫걸음으로서 샌다이시에 재학 중인 대학생을 대상으로 한국어와 한국인에 대한 의식조사를 시행했다. 그 결과, 한국어에 대해서는 「알아듣기 어렵다」는 이미지, 한국인에 대해서는 「다소 감정적」이라는 이미지가 강한 것으로 나타났다. 한국어가 「알아듣기 어렵다」는 이미지가 강했던 것은 일본어에는 없는 한국어 특유의 발음을 습득해 가는 과정에서 그 이유를 찾아볼 수 있으며, 한국인이 「다소 감정적」이라는 이미지가 강했던 것은 양국 간의 역사문제나 영토문제에 관한 의식차이가 여전히 큰 것이 원인이라 하겠다.

또한, 한국어의 학습 동기에는 한류라는 사회현상이 깊이 관련하는 것으로 드러났고, 실제 학습을 체험한 50%의 학습자는 특히 발음 습득에 많은 어려움을 겪고 있다는 사실이 밝혀졌다. 초·중급자를 대상으로 한 학습교재의 개발을 서두를 필요가 있겠다.

한국인에 대한 이미지 조사의 결과는 한국에 대한 관심도는 높은 것으로 나타났지만, 한국에 대해서는 잘 모르거나 전혀 모른다고 답변한 참여자가 50%에 이르는 등, 관심도와는 모순된 결과를 얻었다. 학습자에게 단순히 문법지식을 전달하는 데에 그치는 것이 아니라, 한층 더 심화된 종합적인 지식 전달의 필요성을 보여주는 결과라 하겠다.

마지막으로, 한국어와 한국인의 이미지 형성에 가장 영향을 미치는 요인을 찾기 위한 조사에서는 한국어 학습을 한 경험이 있는지 없는지가 아닌, 한국인 친구가 있는지 없는지가 한국어와 한국인의 이미지에 큰 영향을 미치는 요인이라는 결과를 얻었다. 한국어 학습자에게 민간 차원에서의 교류나 현지민과의 교류를 촉진할 기회를 제공하는 것은 곧바로 한국어와 한국에 대한 이미지 개선에 좋은 영향을 미칠 것이라 예상된다.